聖霊降臨後第１７主日（特定１９）　　上から目線のキリスト教　　２０２４．９．１５．

今日の福音書には、マルコによる福音書の８章「ペトロ、信仰を言い表す」話と、９章の「汚れた霊に取りつかれた子をいやす」話のどちらを選んでもいいことになっています。私は、８章の方の、ペトロの信仰告白と、それに続く、イエス様がペトロをサタンと呼んだ話の方で、説教をしようと思います。

イエス様は、短い宣教活動の半ば頃、弟子たちとイスラエルの北の方へ旅をしました。それは、弟子たちが自分のことを理解しているかどうか、試してみる、研修旅行のようなものだったと思います。イエス様は、弟子たちに二つの質問をされました。最初は「人々は、わたしのことを何者だと言っているか」というものでした。人々の評判についての、噂を聞いたんですね。

そして、イエス様はもう一つの質問をされます。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」という質問です。人々の評判ではなく、自分自身の考えを言いなさい、と問われました。するとペトロは「あなたはメシアです。」と答えます。この答えは、イエス様を満足させたのだろうと、言われています。マタイによる福音書では、ペトロの信仰告白を喜ばれて、「この岩の上にわたしの教会を建てる。」とまで言われています。

ところがその後、イエス様が、御自分は多くの苦しみを受けて殺され、三日後に復活することを教え始められると、ペトロはイエス様をわきへお連れして、いさめはじめます。すると今度は、イエス様がペトロを叱られます。「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。」

最初ほめられた、「メシア」という言葉でペトロの言いたかったのは、当時の人々の理解していた「預言者や王様など、指導的立場に立っている人」のことだったのです。このような人々は、その職に就く時、頭に油を塗られる習慣がありました。現在も英国の王様の戴冠式には油を塗る習慣が残っているようです。「メシア」には「油注がれた者」という意味があるのです。

しかし、イエス様の考えておられるメシアは、イザヤ書の後半などに出て来る、「苦難のしもべ」のことだと、言われています。イエス様の言われる「メシア」は、人々の苦労を背負ってくださる救い主のことであって、そんな自分の十字架を背負う生き方を、弟子たちもしなさい、というのが、今日の結論なのです。

イエス様は人々の重荷を背負って、自分を低くしようと話されているのですが、弟子たちはイエス様を自分たちの指導者として持ち上げて、高くしようとしている。ペトロはこのあと、イエス様の逮捕や十字架刑などで、つまずいてしまいます。しかし、ペトロはつまずいたあとで、やがて立ち直って、イエス様こそが私たちの罪の為に死んでくださった救い主だ、と伝道して行きます。これが伝道の原点だと言えると思います。

しかし、それに続く教会は、ペトロの失敗と同じことを、今もくりかえしているのではないか、ということを私は最近気づかされています。そこで今日はその話をします。

私は日曜日に説教をする時、「イエス様」という風に、「様」を付けて話しています。そうするのが当然であり、そうするべきだと、信じているので、「イエス」という、呼び捨てるような言い方はしていない、という信念を持っています。これは以前鹿児島の牧師だった村上豊吉先生も言われていました。ところが、そのような「イエス様」という言い方は問題があるのではないか、という指摘があります。

もうだいぶ前ですが、島田裕巳という宗教学者が、「キリスト教入門」という本を扶桑社新書として出しています。その本の第１章は、「なぜキリスト教は上から目線なのか」というタイトルでした。

「上から目線」というのには、このような説明があります。
「よく物事を知っている自分が、無知なお前（ら）に教えてやるんだぞ」という態度で、相手を見下しているような姿勢を見せる場合、上から目線、と言われるのです。相手をバカにしたような、偉そうな態度なんでしょう。

島田さんが先ず指摘しているのは、「聖書は読みにくい」特にその文体に問題があるのだそうです。わたしたちが読んでいる「新共同訳聖書」の特徴の一つは「神聖なるお方に対して敬語を用いたということ」。これが聖書の序文に書かれています。神聖なるお方、とは神様であったり、イエス様であったり、ということです。６年前に出た「聖書協会共同訳」もそれを踏襲しています。

今日の福音書では、イエス様の発言、『「人々は、わたしのことを何者だと言っているか」と言われた。』と訳されています。「言った」ではなく「言われた」、聖書協会共同訳では「お尋ねになった」。

これは、私たち信仰者には、当然のことです。先ほども言いましたように、私など説教する時には、神とかイエスなどと呼び捨てにすることはできません。神様とかイエス様とか言います。そして、聖書に書かれている、「イエスは、〇〇された」という表現に慣れてしまっています。

わたしたちは当たり前に読むのですが、ところが島田さんに言わせると、神様とかイエス様のように敬語を使っているのは、キリスト教の信仰を持たない人間がこれを読むと、違和感を覚えてしまう、というのです。

島田さんの指摘した、具体的な面白い例を挙げましょう。なるほどなあと思わされる話です。
『たとえば、会社のなかで、部下が上司に話しかけるときには、敬語表現を使うことでしょう。それでも、会社の外の人に対しては、たとえ社長のことであったとしても、「弊社の鈴木が申したように」という言い方をします。間違っても、「我が社の鈴木社長がおっしゃったように」とは言いません。
歌舞伎の若い役者が、テレビのインタビューに答えていたときに、自分の父親のことを語るのに、敬語表現を使っていたのを目にしたことがあります。歌舞伎の世界では、親が同時に師匠であるために、そうしたことになったわけですが、聞いていておかしく思えたことは事実です。』

私も、ちょっとそんな気持ちになったことがあります。もう２０年以上前のことですが、ローマ教皇のクリスマスメッセージが流された後、日本のカトリック司祭がＮＨＫのアナウンサーと話しているのですが、「教皇様が、こうおっしゃいましたよね。」と敬語で言うのです。

確かに、教会の中では、信徒に対して話をする時、教皇について敬語を使うのはあたりまえなんでしょうが、公共放送で、不特定多数の人が見ている番組で、敬語を使っては、おかしいですよね。歌舞伎の役者が、身内に敬語を使っているのと同様です。

それで、島田さんはこのように言うのです。
『聖書において、イエスに敬語表現が用いられていることに、外部の人間は、やはりおかしいと感じるはずです。にもかかわらず、新共同訳では敬語を用いたことが特筆すべきことにあげられています。そこに、キリスト教を信仰している人たちと、一般の日本人とのあいだにあるギャップが示されています。』

どうでしょうか。聖書の中でイエス様のことを敬語で表現していることに違和感を覚えませんか。
わたしたちは、いつも教会の中だけの交わりで生きているので、その世界だけで通用する価値観ですべてを語っているのです。

そして、そのことが、いつの間にか、神様やイエス様だけでなく、私たち自身も、他の人々から見たら、お高く留まって、「上から目線」で、人々を裁くような態度になってしまっているのではないか、と思うのです。それが、周辺の人々に敬遠されて、教会が人々から浮いてしまうことにつながるように思います。

島田さんは、イエス様が、弟子たちに命令口調で語るのもおかしい。上から目線だと言います。
「人を裁くな。そうすれば、あなたがたも裁かれることがない。人を罪人だと決めるな。そうすれば、あなたがたも罪人だと決められることがない。赦しなさい」

『もしこの個所を次のような言い方に変えてみたら、どうでしょうか。イエスから受ける印象は大きく変わるはずです。』と言って、紹介しています。

「人のことを裁いてはなりません。そうすれば、皆さんがたも裁かれることはないでしょう。人のことを罪人だと決めつけてはなりません。そうすれば、皆さんがたも罪人だと決めつけられることはないでしょう。大切なのは赦すことなのです」

私たちが神様やイエス様に敬意を払うことは、信仰者として正しいことでしょう。しかし、その信仰を人々に伝えようとする場合、私たちの使う敬意を表す敬語が、逆に伝道の妨げになることがあるのではないか。「ひいきの引き倒し」みたいなことになっていないか。

イエス様は、弟子たちに持ち上げられることを喜ぶのではなく、人々の重荷をにない、十字架を背負って人々を助けようとされた。その姿勢に私たちがならう時、教会の中だけで通用するような敬語を使うのではなく、社会で苦しむ人々に、その人たちの友達になろうとするイエス様、そしてわたしたちが仕えてゆく姿勢になってゆくと思うのです。偉い人を紹介するのではなく、私たちは本当に親しい友人を人々に紹介しよう、という気持ちがあるのでしょうか。そのような視点から、わたしたちの聖書の読み方も考え直す必要を感じたことでした。